

平和文化研究 第40集 (2019年5月)

シンポジウム

## 都市の記憶 III

# —旧長崎警察署保存と県庁跡地を考える—

長崎平和文化研究所・附属図書館共催

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

シンポジウム

## 都市の記憶Ⅲ

### —旧長崎警察署保存と県庁跡地を考える—

#### 概要

2019年1月18日(金)に江戸町センタービル4階で、長崎平和文化研究所と附属図書館との共催としておこなったシンポジウム、都市の記憶Ⅲ —旧長崎警察署保存と県庁跡地を考える— の報告をおこなう。ここには、山田由香里「旧長崎警察署庁舎について」、李桓「旧長崎県庁舎跡地の利用のあり方について考える —被爆建造物の保存を視野に」、三瀬清一郎「江戸町の現状」、中嶋恒治「朱印船貿易博物館」の4つの論考を並べ、上川ひろみが作成したポスター、司会をした上菌恒太郎のつなぎ、当日参会者との質疑応答を収録した。

はじめに.....	4
山田由香里「旧長崎警察署庁舎について」 .....	5
李桓「旧長崎県庁舎跡地の利用のあり方について考える —被爆建造物の保存を視野に」 .....	25
三瀬清一郎「江戸町の現状」 .....	33
中嶋恒治「朱印船貿易博物館」 .....	38
質疑応答 .....	41

# 都市の記憶 III

旧長崎警察署保存と県庁跡地を考える

長崎平和文化研究所・附属図書館共催

## シンポジウム

2017年・2018年の大学祭で開催したシンポジウムを、大学を飛び出して行います。  
長崎の未来を一緒に考えてみませんか？

日時

**2019年1月18日(金)**  
18:30～20:30

会場

江戸町センタービル4階  
総合資格学院長崎校大教室  
(長崎市江戸町6-5江戸町センタービル4F)

参加費無料

### 〈シンポジスト〉

- 山田 由香里  
長崎総合科学大学 建築学
- 李 桓  
長崎総合科学大学 建築学
- 三瀬 清一郎  
江戸町商店街振興会会長
- 中嶋 恒治  
築町商店会会長

### 〈司会〉

- 上藺 恒太郎  
長崎平和文化研究所 所長



過去のシンポジウムの様子

### 【お問い合わせ先】

長崎総合科学大学 長崎平和文化研究所

☎095-838-4835 (所長室) ✉peace@NiAS.ac.jp

🌐<http://www.nias.ac.jp/center/ri3/> (長崎平和文化研究所HP)

🌐<http://www.nias.ac.jp/> (大学HP)

## シンポジウム 都市の記憶Ⅲ

### —旧長崎警察署保存と県庁跡地を考える—

はじめに

上菌：長崎平和文化研究所の所長をやっています上菌（かみぞの）と申します。長崎平和文化研究所はシンポジウム都市の記憶シリーズとして、歴史的な記憶の基板の上に現在の人がこの町にどう生きていくのかを考えたいということで、シンポジウムを重ねています。今回は3回目、『都市の記憶Ⅲ』です。

今日は旧長崎警察署と県庁跡地について、長崎総合科学大学の建築学のお二人にお話をいただき、地元商店街のお二人にお話をいただく形で、シンポジウムを進めさせていただきます。建築というとならすぐ建物をどう造るかを考えるので、商店街と合わないんじゃないかと思われるかもしれませんが、建物をどう保存するかと、町全体をどのようにつくるかは密接につながっています。町全体をどう活性化するのかの視点から、その都市、町をどうつくるかという、建築と商店街の二つの声を絡み合わせて町をどう構想するか、シンポジウムを進めさせていただきたいと思います。このシンポジウムで、この長崎が現実的に、歴史の基板の上にどう発展していけばいいかに話が及べばいいと思います。

町の皆さんの話を伺っていますと、地元の話が聞き届けられていない。地元の声が聞かれないままに計画が進んでしまっているところがあります。我々としては地元の話に耳を傾けながら考えていこうと思います。

順番として最初に山田由香里先生に、旧長崎警察署が保存に値する建物だというお話をさせていただきます。それから李恒先生に、建物を保存するに際して、県庁の辺り、この場所から大浦天主堂や浦上天主堂、寺町などいろんな場所につながっていく起点になる場所として、そこからどのような人の流れや構想が考えられるか、お話をいただきます。その上で、地元江戸町の三瀬清一郎さんに、地元はどう考えているのかをお話しいただきます。三瀬さんは被爆体験の語り部でもいらっしゃいます、その意味では旧長崎警察署が被爆建造物だという点も十分に理解していらっしゃいますし、その上で町の活性化として何が必要かをお話しになるだろうと思っています。中嶋恒治さんは、この間伺ったところでは、朱印船貿易博物館という形で歴史基板として、都市の記憶を辿っていける、そういう場所にしてはどうかとお話しになると思います。

歴史を辿る意味では、この長崎の原点になる、デ・ルカ・レンゾ氏の、いわゆる岬の教会が歴史的にまた地理的にどの位置にあったのかの論文も今日配布させていただいています。その論文では、18名のイエズス会士が埋葬されたと確定しています。有名な人たちが埋葬されていたんだなと思います。その痕跡も何もないのか、何らかの痕跡が発掘できるかもちゃんと調べる必要があると。

こうした長崎の始まりから都市の記憶を辿って、御朱印船の時代、そして現代の課題へと思考をめぐらしていければありがたい。最後に皆さんと一緒に議論したいと思います。

それでは早速山田先生、お願いいたします。